「＜品＞をどう感じるのか？」

2018 年 1 月 20 日（土）15:00-17:00

参加：17 名
司会・文責：堀越

1. 概要：
   ・初参加者 5 名を含む総勢 17 名で、主に、＜品＞（以下、品と表記）に感じる諸要因、および、品を感じるときにそれら諸要因をどう感じているのかについて考え、対話をした。

2. 対話：
   (0) 問いの提起
   ・普段のルールに加え、「なるべく発話者が考える品を念頭に、品良く語って欲しい」とお願いした。
   ・進行から「品とは何か？という問いを常に考えながら、まずその品どう感じるのか？」という切り口から考えたいと提起した。
   (1) 品がある・いいと感じる・感じない対象とは何か？
   ・育ちが良い人。・当たり前のことを当たり前と感じさせてできる人。・横綱（横綱には品格がないといけない）：朝青龍には品格がなかったのか。・良い教育をされている人。・他人に不快な思いをさせず、楽しませようとする人。・八千草薫：不快感が全くない。・ゆとりがある／押し付けない人。・自己主張が抑えられている人やもの。
   ・茶道。・京料理。・歴史があると感じるもの。・太陽と月を比べると、月の方が品はいい。
   ・逆に、下品や品がないという対象は、やり過ぎている。・富士山は大き過ぎて、品を感じない。
   (2) どのように感じるのか？
   ・例えば、京料理に品を感じるとき、見る、味わう、嗅ぐ、の三感を使って認知する。
   ・組み合せが大事で、バランスが必要なのではないか。個々の要因：パラメータ（感覚の種類）で品が良いとしても、全体の組み合せでは品を感じないということがある。
   ・美しさや美意識が関係しているのではないか。
   →同感だが、美の概念を持ち出すことは、単に「品」を「美」と言い替えていることにならないか。
   (3) どういう要因に品を感じるのか？
   ・穏やかな気持ちになるもの。豆富料理は、強い味ではないし、穏やかな気持ちになる。
   →豆富に品を感じるという点には、地域性がないか。
   ・品は、貴族（フォーマル）と庶民（カジュアル）を比べると、カジュアルの側への親和性が高い。
   ・品があるものは、そもそも質が良い中で、適切なバランスを保っている。「過ぎたるは及ばざるが如し」にはなっていない。
   (4) どういう場合に品を感じないか？
   ・値段が高い、あるいは高額が必要なものに品を感じない。質が同じであれば、値段が安い方に優しさや柔らかさを感じ、品を感じる。品の良さと値段の間には、絶妙なバランスがある。
   ・その対象に対して緊張感を抱くと品が良いとは言い辛い。
   ・誰かの欲望があり、それが感じられる（見える）ときには品を感じない。
   ・頑張っている感があると品を感じない。
   ・富士山の例について、確かにある時点でそのあまりの大きさに圧倒され、品を感じなかったとしても、その後に世界や日本中の他の山々を知り、やはりその稜線の優雅さや慎ましさ等から品を感じることもあるのではないか。
   (5) 品をどう感じるのか？
   ・品を直接的に感じるのではなく、他の何か（パラメータ）を感じているのではないか。例えば、品は素因数分解できて、それぞれの素因数を感じることで、品を感じると思うのではないか。
   →興味深い指摘であり、もしそうであれば、それぞれの素因数としては、今まで挙がったパラメータとして、例えば、ゆとりがある、穏やかな気持ちになる等が当てはまるということになる。
   →分解できるとすれば、その各素因数で表現をすれば良く、なぜ「品がある」という表現をする必然性があるのか？
   →個々の素因数で表現する限りは、その個々の素因数による表現しかできないが、それらのバランスや組み合せが良いという表現は、それらを統合する、別概念としての＜品＞という表現でしかできないのではないか。
   ・茶道に品を感じるとき、そこには、お茶を点てる人の立ち居振る舞いによる穏やかさ・清楚さがあり、美意識、さらにはわび（侘）さび（寂）にも通じている。
   ・そもそもその人に品がないと、品を感じる対象における品が判らないはずである。
   ・素因数分解理論についてだが、単純な掛け算ではなく、そこには関数 f があるのではないか。そしてその関数 f は、文化的・道徳的に経験によって洗練されて行き、変化していくのではないか。
   →明確に関数 f が言えるなら、教育により伝達できるはずで、そうではないのではないか。
   →そうであれば、どこの国にも品という概念はあるはずだが、欧米を例に考えると、なかなか品という概念に相当する単語を探すことはできない。また、類似概念の質が品とは違うことも明らかである。品という日本語を英語等の他言語へ翻訳できているのか。
   →本当にそうか。翻訳や探せていないだけで、他の国の人々にも、それぞれの素因数（パラメータ）の組み合せやバランスが優れている様子を説明し、価値を認めてもらうことができるのではないか。

3. まとめ：
   ・品を感じるとき、それを想起させる諸要因が複合的に統合されて感じ取るという素因数分解理論は興味深く、テーマ提起者としては意外な考え方であった。この理論の妥当性については読者の黙考に委ねたい。

以上